

ジュディス・バトラー「触発する言葉 —パフォーマティヴィティの政治性—」[5]

## 行為遂行的発言

オースティンのいう行為遂行的発言 (performative utterances) とは、事実確認発言すなわち言明 (statements) に適用される真偽なる基準からそもそも逸脱した、言明の域にとどまらない発言である<sup>1</sup>。オースティンは、「この船を『クイーン・エリザベス』と名付ける」「六ペンス賭けてもいい、明日は雨だよ」などといった発言を挙げ、それらは何事かについての報告 (言明) ではなく、「言うとき実際にその行為を遂行しているのだ」[4, p.383] という。そのように、その発言において行為が遂行されるような発言を、行為遂行発言とよぶ。オースティンはこれにもとづいて、発話行為 (speech act) を次のように分類する。[6, p.60]

1. 発語<sup>2</sup>行為 (locutionary speech<sup>3</sup> act)—何らかの言語表現を発する行為。
2. 発語内行為 (illocutionary speech act)—何かを言うことによって遂行する行為。例えば、宣言、命令、質問、警告、依頼、約束。
3. 発語媒介行為 (perlocutionary speech act)—発語内行為として何かをいうことにより、その結果何らかの発話の効力を引き起こす行為。

たとえば「窓を開けてください。」というような発話は、まずそのように言語表現することで発話行為を遂行し、同時に依頼という発語内行為を遂行し、しかるのちに相手に窓を開けさせるという発語媒介行為を遂行する。このようなオースティンの理論は J.R. ロスによって言語学に導入され、遂行分析 (performative analysis) として活かされている。

さらに「発話内行為は、発話の瞬間に行為をおこなうが、その瞬間が儀式的であるために、それはけっして語られる瞬間だけに限られるものではない」[5, p.9a]、歴史的な広がりをもつ行為であるという。これに対してバトラーは侮蔑発言を持ち出し、「言葉によって侮辱されるということは、文脈を失ってしまうこと、自分がどこにいるかわからなくなることである。」[5, p.9b] として、その「歴史性」すなわち「発話がなされる全体の状況」を特定するのは困難であるとオースティンを批判する。

## 呼びかけの理論

オースティンが発話に先立って発話主体を想定するのに対して、アルチュセールは発話行為 (あるいは言語) が主体に先行し、主体を言語的に構築するとする<sup>4</sup>[5, p.27a]。バトラーはこの両者を、呼びかけによって構築された主体 (アルチュセールの主体) がつぎに他に呼びかける主体 (オースティンの主体) となることを説明することによって架橋する。

アルチュセールは、呼びかけを行う主体をイデオロギーに仮託して神に求めた。「イデオロギーと国家のイデオロギー装置」のなかでアルチュセールは、イデオロギーの主体構築の力を記述しようとして、名づける神の声、また名づけることによって主体を誕生させる神の声という比喻をつかった。神の名は、名づけるものを作りだすと同時に、それが作りだすものをのれに隷属させる。社会のイデオロギーは神の声に類似したはたらきをすと述べたアルチュセールは、無意識に、社会の呼びかけと神のパフォーマティヴィティを

<sup>1</sup> 「結局それらは、そもそも言明であることをやはり本当に目指していたものだったのか、と。ひょっとしてそれらは事実を報告するつもりのものでなくて、あれやこれやの仕方て人々に影響を与えたり、あれやこれやの仕方ていらいらを発散させたりするつもりのものであるまいか。」[4, p.381]

<sup>2</sup> 言語学では「発語」と訳されているらしい。

<sup>3</sup> [6] では “speech” は略されているが、ここではバトラーに倣って補った。illocutionary, perlocutionary — act についても同様。

<sup>4</sup> ところで今村仁司は、アルチュセールにおける重層決定論がラカンの無意識の理論をモデルとしていることにとどまらず、イデオロギー論さえも同様であることを指摘している。「ラカンの無意識の理論は、(中略) イデオロギー論に適用できる。なぜならイデオロギーは、まさに無意識と同様に象徴界と想像界の二層でできているからである。無意識が他者のディスクリールであるのと同様に、イデオロギーも文字通り他者のディスクリールであるからである。つまり、イデオロギーとは無意識なのである。」[3, p.125] さらにアルチュセールにおいては、このイデオロギーこそが呼びかけをする神の位置に立つ先験的主体である。それは不断の認識論的切断によってその都度克服されてゆかねばならない。

同種のもののみなした。」[5, p.33a] のである。これに対してバトラーは、「名づけるものを誕生させる神の声という比喻を思い出させ、その比喻を再定着させる声に、呼びかけの生産的な力を、特定してしまった。」[5, p.33b] としてアルチュセールを批判する。ここにおいてバトラーは、言語は単に引用され再生産されるだけのもの（国家のイデオロギー装置）ではなく、イデオロギーの域を脱したものとして捉えている。それぞれが本論の主題である、既存の体制を打破する機序としての行為遂行性の政治性である。

## 言葉による被傷性

行為体とは、言語を引用し、使用してゆく存在である。ただしここで注意せねばならないのは、行為体は言語を完全に支配したり制御できるような主体ではないということである。「発話行為は、それが語るつもり的事柄以上のものを、当初の意図とは違った風に語ってしまう。」[5, p.15b] ものである。それは、「身体は語りの盲点であり、語られている内容を超越する事柄を演じる。」[5, p.16a] こと、「発話と身体は互いにスキャンダルな関係にある」[5, p.15a] ことに負っている。

さらに言葉による傷が身体的な傷の比喻によって表現されること、これは逆に、「言語の次元で呼びかけられることによって、身体のある種の社会的存在が可能になる」[5, p.10b] ことを示唆している。つまり言葉によって指示されること、すなわち「言語の次元で呼びかけられる」ことが、社会的で認識可能な主体を構築する要件である<sup>5</sup>。

侮蔑発言を発話内行為とする立場は、その発言に呼びかけられることによってはじめて主体が存在論的に存在可能となるというアルチュセールの立場に近い。このとき「われわれは、呼びかけによって存在するものであるゆえに—存在するためには、《他者》の呼びかけを必要とするものであるゆえに—言語に対して被傷性を帯びているのである。」[5, p.28b] といえる。これらの見解にしたがえば、我々はその存在の基礎からして呼びかけに依存しているものであり、呼びかけられてしまっている状態においてそのような呼びかけたる侮蔑発言に抵抗する手段はない。唯一、そのような侮蔑発言に採りうる対処は、「言語の—もっと厳密にいえば、言語による主体構築の—基盤に存在する事柄<sup>6</sup>を破壊」[5, p.29a] してゆく態度よりほかない。アルチュセールの理論においてそれを実現するのは、認識論的切断である。

対してバトラーは、侮蔑発言の効力を失墜させるような言語活動の方法を探っている。侮蔑発言が発話内行為であるとすれば、その対抗措置としては、発話そのものを規制するのが妥当であるように思われる。しかし、「侮辱的な名称には、明らかに歴史がある」[5, p.36b] のであり、「名称の力は、（中略）秘匿された記憶やトラウマをつうじて（中略）機能するものである」[5, p.37a]。「侮蔑発言を規制しようとする提案はつねに、侮蔑発言を延々と引用し、膨大な例のリストをつくり、規制するという目的でそれらを分類し、そういった発言を通じてなされてきた侮辱を、今度は教育的目的のもとに繰返すことになる。」[5, p.37b] として、侮蔑発言の規制はトラウマを温存するものであり、実践的な試みとしてそれらは失当であると指摘する。バトラーは「国家が後援する検閲ではなく、言語が社会的、文化的に苦闘して、行為体が侮辱から引き離されるように—侮辱が、それから派生したものによって逆襲されるように—ならなければならない。」[5, p.41b] として、我々はあくまで行為体として、侮蔑発言を引用し、それを再加工し、別の文脈のなかに再埋め込みするべきであると主張する。

## 疑問点、等

### 歴史性

バトラーはオースティンの理論を、発話行為の「全体の状況」すなわち「凝縮された歴史性」[5, p.9a] を把捉することは困難であるとして批判している [5, pp.8b–9b]。しかし一方で、侮蔑発言に関しては、「名称には、歴史性がある」[5, p.37a] といい、そのトラウマたる歴史性を更新してゆくべきであると主張している。おそらく後の主張のほうがバトラーの本論であるうが、このふたつの主張の整合性が掴めない。

### 呼びかけ

アルチュセールとオースティンを接合したバトラーの立場は、主体のあいだにいわば「呼びかけの連鎖」ともいべき言語的な連関を想定する。しかし、その呼びかけの連鎖が開始される原点を特定の主体に求めら

<sup>5</sup>そして同時に、言葉で呼びかけられないものは、「<sup>ア</sup>「おぞま<sup>ヴ</sup>しき<sup>ジエ</sup>もの」として放逐される」[5, p.11a]。

<sup>6</sup>アルチュセールにおいては、神による呼びかけ。

れない以上、その原点＝起動力をアルチュセールのように神に求めるよりほかないのではないか<sup>7</sup>。

さらにバトラーは、「「侮辱」は、まさに呼びかけの行為によってなされるもの—主体が自然発生する可能性を締めだし（同時に、まさにその可能性の幻想も生みだす）行為によってなされるもの—なのである。」[5, p.29a] と、呼びかけに依らない「主体の自然発生」なるものをも考えているらしいが、これはいかなるものか。それともこれはことばの綾か。

## あまり関係なさそうなこと

1. 竹村訳では「おぞましきもの」とルビを振ってあるけれども、原文は“abjection”だからアヴジェじゃなくてアブジェと振るべきでは？ フランス語読めないからよくわからない。たぶんオブジェ(objet)と同様にアブジェ(abjet)になるんじゃないかと思うのだけれど（手持ちの仏和辞書には abject しか載ってない）。誰か知ってる人、教えてください。それにしてもなんで竹村訳はわざわざフランス語のルビをふっているんだろう？ あれ、もしかしてフランス語じゃない？
2. 竹村による解説の最後に、「著者ジュディス・バトラーは、現在カリフォルニア大学バークレー校の修辞学および比較文学の教授であり」[5, p.7b] とあるけれど、正確には「修辞学部の教授で学部長で、比較文学部の教授」みたいです。Judith Butler is Chancellor's Professor in the department of Rhetoric and Comparative Literature at the University of California, Berkeley.[1, 裏表紙] ウェブには JUDITH BUTLER, Professor and Chair, Feminist theory, 19th and 20th century, continental philosophy, Philosophy and literature, Social and political thought. と載っていました。

## 参考文献

- [1] Judith Butler. *Excitable Speech : A Politics of the Performative*. Routledge, New York and London, 1997.
- [2] 木田元（編）. 現代思想フォーカス 88. 新書館, 2001.
- [3] 今村仁司. 現代思想の基礎理論. 講談社学術文庫. 講談社, 1992. （原著は国文社『社会科学批評』(1983)）.
- [4] J.L. オースティン著, 坂本百大監訳. オースティン哲学論文集. 双書プロブレマタ. 勁草書房, 1991. = J.L.Austin, *Philosophical Papers*, 2nd ed., 1970, Oxford Univ. Press.
- [5] Judith Butler 著, 竹村 和子訳. 触発する言葉：パフォーマンスの政治性. 思想, No. 892, pp. 4-46, 1998. = *Excitable Speech : A Politics of the Performative*, New York & London, Routledge(1997).
- [6] 井上和子, 原田かづ子, 阿部泰明. 生成言語学入門. 大修館書店, 1999.

---

<sup>7</sup>ただしこの疑問はあまり意味のあるものではない？ 現に社会において呼びかけの連鎖が成立している以上、その原初を探る必要はない？